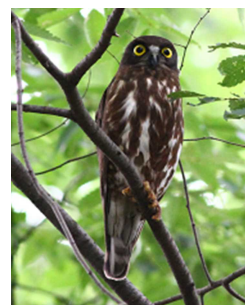


季節

1. アオバズク

青葉の季節に渡来することから名付けられたフクロウの仲間です。毎年4月下旬に打吹山に夏鳥としてやってきます。2018年は4月19日に確認しました。遅い年でも5月上旬には見られます。見られるといっても姿はシルエットで、もう一つは鳴き声での確認です。

昼は活動しません。樹木の茂みでじっとしています。2度遭遇しました。一度目は目線の高さくらいの位置の枝に止まっていたのですが、枝の上には雨が通らないくらい枝葉が茂り、前面も枝葉で隠されていました。たまたま屈んで覗き込んだため気づきました。二度目はイロハモミジの高木の高さ数mの枝葉の中でした。ヒヨドリとシジュウカラの鳴き方に異常を感じてそちらを見ると、アオバズクが見えました。複数のヒヨドリやシジュウカラに騒がれて飛び去りました。このように他の鳥が警戒して周囲で騒ぐことは、よくあるようです。



大木の空洞などで営巣しているはずですが、確認できていません。夜8時も過ぎて暗くなるとホーホーと鳴きながら移動していきます。最初は打吹公園の西側から東側の方へ、夜も更けてくると市街地のテレビアンテナを移動しながら、なわばりを主張します。明け方まで鳴き声を聞くことができます。夜中、時には外の音を聞いてみると発見があります。

小型ですが、猛禽類であり、ネズミなどを餌としている鳥です。小学生の時に巣から落下したヒナを手にしたことがありました。両手で持ったところ、左腕に爪をたてられました。離そうとしても指を強く握りとれません。頭に風呂敷をかぶせて目隠しをし、指を上下に引っ張って離すために大人2人がかりの作業でした。くちばしで怪我をしたこともあります。危険ですから手を出さないことです。

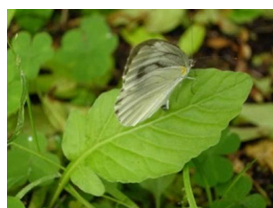
2. 青葉の香り

クスノキ科(例:クロモジ)やセリ科、ウコギ科(例:コシアブラ)の植物のように特有の強い香りを持っているものは別として、強弱はあるものの大多数の植物は葉をちぎったりすると、青臭い香りがします。器官によって強さは変わりますし、時期によっても変化します。また、何もしない時と傷をつけた場合で違いがあり、傷つけたとき強く匂います。細胞内に原因があるからと考えられます。器官、時期によって香りはどのようになっているのでしょうか。 サワハコベ (ナデシコ科)



大根葉の青臭さが最も強いように感じます。打吹山の草についても調べてみました。5月、新芽が成長したところで、次の6種について、葉を揉んで嗅いでみました。感覚には個人差がありますから皆さんそれぞれの結果になると思います。青臭さを最も感じたのは、スイバでした。

4月上旬では、スイバが最も青臭く、ハコベ、イヌガラシ、ゲンノショウコはかすかに匂い、ノブキ、タネツケバナは感じませんでした。芽出し時期には匂いが弱く、成長につれてだんだん強くなっていきます。



この青臭さは、青葉アルコールの複合が低濃度はさわやかであり、高濃度は嫌な臭いといった話があるそうですが、植物が香りを持つということは、生きていくうえで意味があるからだと考えられます。昆虫の嗅ぎ分けは、感覚や種間差の表現で生きていそうです。

イヌガラシ (アブラナ科)